

# うるま市の戦後復興



【舞台から再起を促す（石川難民収容所）】『斎場の杜』第4・第5合併号（知念村文化協会）

**心に刻まれる沖縄戦**  
75年前、沖縄戦は『鉄の暴風』とも表現されるように、日・米両軍の壮絶な地上戦が繰り広げられ、戦禍の中で20万余の尊い生命や多くの財産、文化財などが失われました。痛ましい沖縄戦の爪痕は現在も県内各地に残っており、また人々の心の中にも「忌まわしい記憶」として深く刻まれています。

## 昭和20年8月——石川から始まった沖縄の戦後復興

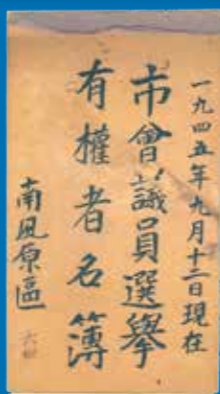
戦争により難民となった人々は米軍が県内各地に設置した収容所に送られました。収容所での生活は平穏なものではなく、雨露を凌ぐだけのテントに押し込められ、わずかな食料での生活が続いたといえます。

そんな中、昭和20年8月15日各地区の収容所の住民代表が石川に集められ、沖縄の戦後について話し合いが行われました。8月20日には住民代表の中から15人の委員が選ばれ、沖縄戦後の政治機構『沖縄諮詢会（のちの沖縄民政府）』が石川で発足しました。

委員長には志喜屋孝信（赤道出

嘉島を含めて平安座市と呼ばれるようになり。同年9月には、他の市と同様、市議員選挙と市長選が行われました。

戦後誕生した3市が、具志川市、石川市、与那城町、勝連町を経て、現在のうるま市となります。



## 日本初！女性への選挙権が認められた選挙！

昭和20年9月20日に行われた市議員選挙と9月25日に行われた市長選挙は、収容所内での選挙ではありませんが、25歳以上の男女に選挙権が与えられました。日本本土では翌年4月10日に女性の参政権が行使されているので、この選挙は、日本の歴史上女性が初めて参加した選挙ということになります。

前原市市議員選挙 有識者名簿 南風原区 ▶

身）が選出されました。沖縄諮詢会は、食料配給や戸籍法の整備や教育・公衆衛生を進め、各地の市長選挙や市議員選挙を行うなど、行政の基盤となる事業に取組みました。現在のうるま市のある地域では、『石川収容所』『高江洲収容所』『平安座収容所』があり、この3つの収容所から、後にうるま市を形成する『石川市』『前原市』『平安座市』が誕生しました。

昭和20年9月、市議員選挙と市長選挙が行われ、この収容所を基盤として石川市が発足しました。この収容所は、行政上「高江洲市」と呼ばれ、役場は戦禍を免れた旧仲喜洲国民学校（現・高江洲中学校）跡に置かれていました。

## 前原市の誕生

米軍は、占領下においた高江洲、仲嶺（豊原）、塩屋、川田の区間に民間人難民を収容する『高江洲収容所』を設置しました。その後、収容所を含む具志川村、美里村南部、勝連半島一帯をさして「前原地区」と呼ばれるようになり、昭和20年9月、市議員選挙と市長選挙が行われ、南風原収容所を加えた「前原市」が発足すると、高江洲市が廃止されました。

## 石川市の誕生

石川のある場所は沖縄本島で最も小4キロ足らずの地峡だったため、米軍はいち早くこの線を確保。沖縄本島を分断し、戦局を有利に導きました。米軍はすぐに避難民収容所を設置し、避難民を続々と収容し始めました。石川は、安全地帯として続々と避難民が送り込まれ、一番多いのは那覇、読谷、北谷方面の人々だったそうです。

実は、地元の集落の人々は石川岳の奥の谷間や伊波・嘉手苅・山城などの丘陵地内のガマに避難しており、避難民収容所になっていたのを知ったのはしばらく後だったそうです。

## 平安座市の誕生

昭和20年6月に与那城村屋敷名住民の一部と宮城、伊計両島6部落の住民を平安座島に移し、地元民と合わせて7千人余りが平安座収容所に収容されました。

収容所ができた当初から平安座市と呼ばれていたようで、アメリカ軍によって市政がしかれ、浜比



米兵に収容所へ案内される少女